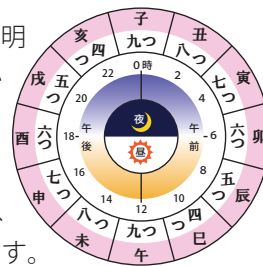


時の鐘年表

年号	西暦	川越城主	できごと	文献資料
寛永4 ～11	1627 ～34	酒井忠勝	創建 鐘は小川氏が铸造。	鐘銘(松平大和守家記録)
承応2	1653	松平信綱	信綱入封時、鐘が破損していたため新たに铸造。椎名兵庫铸造。 「形小さく音低い」ので外して会所に置く。	川越素麺
宝永年中 ～11	1704	秋元喬知	喬知入封の際、甲州谷村の鐘を伴い時の鐘につけ「長久の音」と呼ばれる。沼上七郎左衛門正次・河野七郎左衛門良正が铸造。	川越素麺など
享保18	1733	秋元喬房	鐘撞堂の上に火の見櫓をつける。	川越素麺
宝暦3頃	1753	秋元涼朝	鐘継ぎした櫓が壊れる。	多濃武の雁
明和4	1767	松平朝矩	朝矩が入封時、太鼓で時を報せていた。	松平大和守家記録
明和5	1768	〃	長喜院の鐘を借りる。	
明和7	1770	松平直恒	小川五郎右衛門為勝が铸造。	
安永3	1774	〃	大火で焼失 長喜院で時報を行う。	
安永5	1776	〃	再建 行伝寺の鐘を借りる。重さ1000斤、全長3尺6寸、周囲8尺。	
嘉永2	1849	松平齊典	鈴木重次郎铸造。重さ306貫、全長6尺、直径3尺。音が低く、再び行伝寺の鐘を借りる。	
安政3	1856	松平直侯	大火で焼失 大蓮寺で時報を行う。	
安政4	1857	〃	再建 広済寺の鐘を借りる。	
文久元	1861	〃	小川五郎右衛門栄長が铸造。重さ170貫、全長4尺7寸3分、直径2尺5寸。	
明治26	1893		3月17日川越大火で焼失	
明治27	1894		再建 棟梁関根松五郎、鐘は矢沢四郎右衛門铸造。重さ186貫250匁、全長1.3m、外径82cm	矢沢家文書等
昭和3頃			昭和の大改修①(主柱根切り・独立コンクリート基礎設置)	
昭和33	1958		市指定文化財・史跡に指定	
昭和35	1960		昭和の大改修②(3階筋違取付・屋根葺替・下見板張替)	
昭和50	1975		川越市文化財保護協会が自動打鳴機を寄贈	
昭和58	1983		昭和の大改修③(屋根葺替・避雷針設置・塗装)	
昭和59	1984		市指定文化財・有形文化財建造物に種別変更	
平成8	1996		環境庁「残したい日本の音風景100選」に認定	
平成11	1999		時の鐘所在地を含む一帯が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定	
平成27 ～28	2016 ～17		耐震化工事(耐圧盤打設・補強金物取付、主柱根継ぎ・礎石建ち復原)	

時の鐘は何時につくの？

江戸時代は現在とは異なり、夜明けから日暮れまでを昼、日暮れから夜明けまでを夜とし、昼と夜をそれぞれ6等分にして1刻としていました。1刻は約2時間ですが、季節により1刻の長さが変わります。



これを「不定時法」といいます。時刻の呼び方は九つから四つまでの数や十二支が使われました。

時の鐘は、「九つ」には9回というように時の数の回数を撞き、1刻の中間に3回撞いていたようです。また、火事の早鐘として打つ場合は、火元が遠いときは1～3回打って1回休むというような撞き方をし、近い場合は休まず連打したそうです。

不定時法は、明治6年(1873)に現在使われている1時間が常に一定の長さになる「定時法」に改められました。

現在の時の鐘は1日4回、午前6時・正午・午後3時・午後6時に鐘撞きを行っています。

案内図



西武新宿線 本川越駅 から 徒歩 15 分
JR 川越線・東武東上線 川越駅 から 蔵の街経由バス乗車、一番街で下車、徒歩 2 分

川越市指定文化財

時の鐘



川越市教育委員会 文化財保護課

〒350-8601 埼玉県川越市元町1丁目3番地1

☎(049) 224-6097 (直通)

蔵造りの町並みのほぼ中央に位置する時の鐘。鐘撞堂とも呼ばれ、大名や一部の豪商しか時計を持つことをできなかった時代に、時の鐘が時を報らせていました。火事で焼失するたびに再建され、現在の時の鐘は明治 27 年（1894）に再建されたものです。

時の鐘の歴史

時の鐘は、江戸幕府の重臣酒井忠勝が川越城主だった寛永 4 年から 11 年（1627～1634）の間に、多賀町（現・幸町）の常蓮寺境内に創建されたと伝えられています。勤勉で時間厳守を徹底したという忠勝は、城下にも正確な時を報らせるために時の鐘を建てたのでしょう。

享保 18 年（1733）、時の鐘に火の見櫓が付け足されます。時の鐘は火事を知らせる早鐘の役目もあったのです。

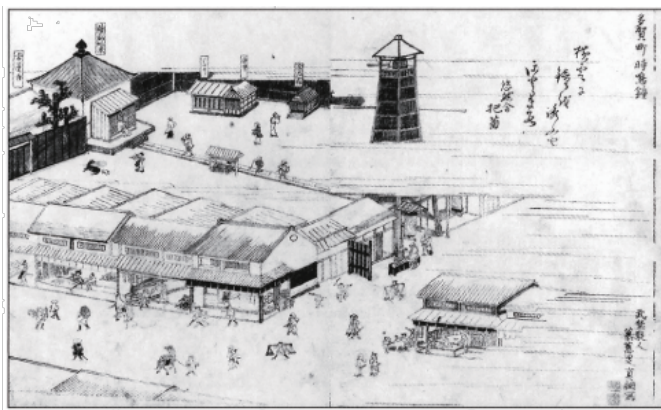


『川越城下絵図』寛延 4 年（1751）川越市立中央図書館所蔵

寛延 4 年（1751）に描かれた川越城下絵図には、「鐘堂」として二重のお堂が描かれています。当時の時の鐘はこんな外観をしていたのでしょう。

銅鐘も大火による焼失などで何度も作り直されており、ときには城下の寺から借りたこともありました。明和 5 年（1768）には長喜院の鐘を、安永 5 年（1776）には行伝寺の鐘を、安政 4 年（1857）には広済寺の鐘を借りています。

江戸後期に鍛冶町（現・仲町）の名主中島孝昌が表した『武蔵三芳野名勝図会』には、今と同様な形で描かれています。

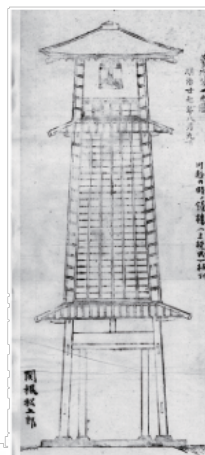


『武蔵三芳野名勝図会』享和元年（1801）より「多賀町時鳴鐘」 個人蔵

明治時代になると、川越町役場が時の鐘を管理していましたが、明治 26 年（1893）の川越大火で当時の川越町の 3 分の 1 にあたる 1,302 戸が焼失し、時の鐘も焼け落ちました。川越商人達はすぐに川越の象徴である時の鐘の再建に取りかかり、明治天皇の特賜金をはじめ、川越出身の実業家などにも寄付を募って、翌年に完成しました。

長く時を告げてきた時の鐘も、時計の普及や大正 14 年（1925）のラジオによる時報の開始により、その役割を終えます。大正 12 年（1923）の関東大震災後には廃止の声も上がったと伝えられますが、岩内太郎という人が鐘撞きを志願し、一日一時も欠かさず打ち続けたそうです。しかし、昭和 10 年代後半、戦時色が深まると、警防上の理由で鐘を撞くことができなくなります。

戦後になると、時の記念日などの特別な日に鐘を撞くのみとなっていました。昭和 50 年（1975）、川越市文化財保護協会から自動打鳴機が寄贈され、時の鐘は再び時を刻み始めました。復活した時の鐘の音は、平成 8 年に環境省の「残したい日本の音風景百選」に認定されています。



棟梁関根松五郎の図面
明治 27 年（1894）
川越市立博物館所蔵

再建当時の姿へ

平成 27・28 年度に行われた耐震化工事で、時の鐘は耐震補強と合わせて明治の再建当時の形状に戻す復原工事をを行いました。最大の復原箇所は 4 本の主柱の根元です。

時の鐘の主柱は、昭和初期には独立コンクリート基礎になっていたようです。明治 27 年の棟梁関根松五郎による図面では礎石建ち（礎石の上に主柱が立つ）で描かれており、調査によりコンクリートの下に当時の礎石が埋まっていることがわかりました。



復原前（独立コンクリート基礎）



⇒ 復原後（礎石建ち）

復原工事では、主柱を根継ぎし、掘り出した礎石を使って礎石建ちに復原しました。また、外壁の小窓をなくしたり、最上層の開口部にあった横棒（昭和初期にガラス窓をつけていた鴨居とみられる）の撤去、外壁の下見板の割り付けなどといった部分も復原しています。

構造	鐘楼	木造 3 層（3 重 4 階建て）
規模	柱間	4.545m（15 尺）
高さ	礎石～桁上端	16.127m
	土間～頂部（総高さ）	17.6m（約 58 尺）
銅鐘	径 82cm	高さ 122cm 重量 約 700kg
文化財指定	昭和 33 年 3 月 6 日	